

鈴木ユキオ・インタビュー【HEAR】

3人のアーティストが作り出す、自由の世界

鈴木ユキオ(ダンス)
辻直之(アニメーション)
内橋和久(音楽)



2010年8月、金沢21世紀美術館で初演をむかえる、鈴木ユキオの新作「HEAR」

これまでの作品にない、アニメーションと音楽とのコラボレーションへの挑戦、そして、2週間にわたり、本拠地を離れたところで行うレジデンス。さまざまな試みを詰め込んだ本公演にあたり、作家としての思いを聞いた

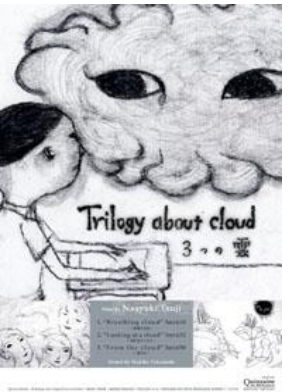
目に見えているものだけではなく、

時間の流れが見えるダンス

●辻直之さん(アニメーション)をなぜ今回パートナーに？

以前、辻さんのアニメーション作品をみる機会があって、今まで自分がみてきたものと全く違うタイプのもので、強く印象に残っていました。描いて消して、描いて消して、、、という描き方で描いた痕跡が画面に残り続けるというそのプロセスそのものにシヨックを受けたんです。

目に見えているものだけではなく、その過程、時間の経過が見えるようなアニメーション。このスタイルが自分の作品の価値観にリンクする部分があるかと思ったり、そういう作品を作りたいと思って、声をかけました。



映像というものに、とても大きな可能性があると思っています。身体とのかかわり、リアルと仮想とのかけひき、時間の流れと蓄積、そのようなものを体験できる可能性が映像を使うことで可能な部分があるのかなとも思います。そこをトライした作品にしたいと思っています。

「音」に、裏切られる

●内橋和久さん(音楽)をなぜ今回パートナーに？

昨年世田谷美術館でのパフォーマンス「eure」を一緒にさせていただいて、すごく良かったんです。彼は、ウィーン在住で、世界中で活躍されているミュージシャン。作品創りは、ネットで映像をやりとりして、クリエイションに臨みました。この経験がとてもおもしろかった。

いい意味で、音楽には、裏切られたと思っています。ダンスにとって音楽はとても重要なものですから。だからこそ、自立したクリエイションができる人とやれるのはとても刺激的ですし、信頼できるアーティストとなら、今の時代、距離はあまり関係ないのだということをとっても感じさせてもらえる機会でした。もちろんその上で実際にあってさらに積み上げることも大切ですが。そして、内橋さんの、トータルで「音」にこだわり、作曲・即興・ポップス・現代音楽、すべてにおいてフレキシブルで自由な考え方に、共感を持っていて、内橋さんだからこそ、この創作方法を可能にしてくれるんだと思います。



劇場をパートナーとして、

クリエイションに挑む、新たな試み

●金沢21世紀美術館でのレジデンス公演について

昨年のトヨタコログラフィアワード受賞者公演「言葉の縁」から2回目になります。2週間劇場をフルに使い、メンバーとともに創作に没頭できる環境は、本当に重要だったと感じました。東京ではなかなかできない。作品に集中し、じっくり向かい合うこと。劇場やスタッフから大きなサポートをもらえることは、

クリエイションを豊かにしてくれます。もちろん、作品にかける時間が多ければいいかというと、そういうわけではないのですが、でも、贅沢に長い時間をかけて環境をしっかりと整えて作品をつくる機会が少なすぎるんです。それを実現させてくれる、金沢21世紀美術館は、自分にとって、見えている部分である劇場という場所の魅力だけではなく、実は見えていない部分の環境を含めたサポートも含めて考えてもらえるよいパートナーだと思っています。そして、このような公演スタイルがその土地独自の企画を生み出したり、また劇場との関わり方として理想的なもの作りのかたちを模索していけたらよいと思っています。

金沢21世紀美術館は、ただの劇場ではなく、美術や空間の魅力でとても風通しがいいですね。私自身もさまざまなところにインスパイアされながら、作品も自分も成長させたいと思います。



**問い続け、聴きつづける
「私はなぜそこにいるのか」**

●今回の作品【HEAR】について
いままでは、とにかく「身体でどうやって見せるか」「存在の強さ」を提示する作品を作ってきました。今回は、それに、いくつかのベクトル(アニメーション・音楽・照明・言葉)をプラスして、もと空間として「身体」をみせていきたいと思っています。

私はなぜそこにいるのか——
これが大きなテーマです。いろいろなアプローチであぶりだされた「自分」という存在をみつめたいと思います。

聴くということとは、自分って何なんだろうとか、身体ってなにとか、ダンスってとか考えている状態に近いと思うんです。自分がなぜそこにいるのか、自分は「何をどう生きているのか、自分の内側に対して耳をすましているような感覚。そして、それ

は決して一人じゃなくて、相手に対して耳をすますこともできる。彼女と私との距離、間、とか。



【HEAR】聴くということとは、問い続けている私そのものです

そして、舞台上では、ダンサー一人ひとりが問い続け、なにかに耳をすましていると思います。その場を、ぜひ多くの人と共有して、私の問いが、みなさんの問いにもなってくれば、うれしいですね。

公演情報

2010年8月21日(土)・22日(日)／金沢21世紀美術館
2011年2月4日(金)―6日(日)／青山円形劇場

振付・演出：鈴木ユキオ

アニメーション：辻直之

音楽：内橋和久

出演：鈴木ユキオ・安次嶺菜緒・福留麻里・横澤祥太郎

お問い合わせ：金魚制作事務所

090-5314-9281 kingyo.company@gmail.com

<http://www.suzu3.com/>